

報告 リオパラリンピック観戦報告

著者	齊藤 まゆみ
雑誌名	筑波大学体育系紀要
巻	40
ページ	71-74
発行年	2017-03
その他のタイトル	Reports Report on the Rio 2016 Paralympic Games
URL	http://hdl.handle.net/2241/00146387

リオパラリンピック観戦報告

齊藤まゆみ*

Report on the Rio 2016 Paralympic Games

SAITO Mayumi*

1. はじめに

Rio 2016 Paralympic Games (通称：リオパラリンピック) は、2016年9月7日から18日までブラジルで開催された。パラリンピックとは、「もう一つの (Parallel)・オリンピック (Olympic)」であり、4年に1度オリンピックと同じ開催都市で行われ、夏季競技大会と冬季競技大会が開催されている³⁾。1948年にルードウィッヒ・グットマン卿 (Sir Ludwig Guttman) が院長を務めるストーク・マンデビル病院で開催されたアーチェリー大会がその原点とされ、当時はリハビリテーション成果の披露という意味合いが強かった。その後国際大会に発展し、1960年のローマで開催された競技大会を遡って第1回パラリンピックと称することとなり、リオパラリンピックで第15回となった。ローマパラリンピックでは21カ国であった参加国は、リオパラリンピックでは160以上の国と地域に拡大し、世界新記録が220更新されるなど、競技力の向上もめざましい。日本はリオパラリンピックで金メダルがゼロであったためメダル順位は64位であるが、獲得メダル総数は前回のロンドンパラリンピックを上回る24個であり、ボッチャやウィルチェアーラグビーがパラリンピックにおいて競技初のメダル獲得をするなど強化が実を結んだ明るい話題もある。

リオパラリンピックには、体育専門学群1年生の瀬立モニカさんがカヌー競技で8位入賞、卒業生では山田拓朗さん (平成26年体育専門学群卒、NTTドコモ) が水泳50m自由形S9クラスで銅メダルを獲得 (図1)、附属特別支援学校や理療科教員養成施設の卒業生、さらにコーチや競技団体、サポートスタッフも含め桐の葉を背負った皆さんの活躍が随所に見られる大会であった。



図1 山田拓朗選手 (S9 50m 自由形銅メダル) のインタビュー風景

2. する・みる・ささえる

オリンピックが終了すると、会場はパラリンピックへの模様替えが始まった。最も大きい変化は、ロゴの付け替えである。パラリンピック・パークには、「スリーアギトス」と呼ばれるロゴが飾られ (図2)、パークへのアプローチには、仮設のスロープ (図3) が設置された。仮設スロープは、金属パイプに金属板がはめ込まれた簡単な構造で、工事現場の足場をイメージしてもらえればよい。しかも様々なところから集めてきた材料を組み立てたかのように、色や形も統一されていないが、最低限の機能は果たしている。移動手段としてBRT (図4) という公共交通も新設されたが、歩行者道路はでこぼこがあったり、途中で終了していたりと必ずしも良いとは言えない。しかし、現地の方が当然のように声をかけ、サポートをする、いわゆるソフト面でのサポートは押し付けや過不足がなく心地よい。心のバリアフリーとでも言えばよいであろうか。東京が招致活動で用いた「おもてなし」の心が、東京パラリンピックでうまく機能することを願う。

パーク内についても仮設対応が多く、階段も急ごしらえ感否めない (図5)。当初は開催が不安視

* 筑波大学体育系
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba



図2 パラリンピックのロゴ (スリーアギトス)



図3 会場へのアクセス道路と BRT 専用レーン・仮設のスロープ



図4 公共交通は BRT



図5 仮設スタンド

されていたリオだから許されるのかもしれないが、東京パラリンピックで今回のような完成度であれば、期待値が高いために、満足度や共感を得られないのではないかと懸念されている。国際パラリンピック委員会（IPC: International Paralympic Committee）は独自のアクセシビリティガイドライン¹⁾を作成しており、パラリンピックで用いる競技場のアクセシビリティを規定している。その中には「人権としてのアクセス」「社会的公正」「公平で平等な機会へのアクセス」といった視点が指摘され、ただその会場に一緒にいるだけでなく、競技を楽しむという平等な「質」の確保の重要性が強調²⁾されている。今回も東京オリンピック・パラリンピック組織委員会の関係者が、アクセシビリティに関する調査として、車椅子ユーザーをはじめとするさまざまな視点でホテルや競技場内、街中における現地調査を行っていたことから、東京パラリンピックではアクセシビリティの視点からもその変化に期待したい。そして、防犯という視点でアクセス道路をみると、制限区域内は銃を携えた軍人が一定間隔で立ち、警備をしている。さらに、パーク内は巡回警備も頻繁で、緊張感と護られているという安心感が複雑に入り混じる（図6）。

パラリンピックチケット（図7）の販売状況は、開催直前でも芳しくないという報道がなされていた通り、競技会場内は空席も目立っていた（図8）。しかし、日ごとに観客が増えてくるのが実感でき、最初の週末には多くの方がパークを訪れていた。現地の方に話を聞くと、オリンピックに比べてチケットが安価であり、地元の観客にも手が届く、またブラジル代表選手の活躍が当初予定されていなかったローカルテレビでも報道されたことが背景にあるようだ。週末は家族連れが、平日は教育プログラムで訪れている生徒たちの姿が目立った。特に人気



図6 会場と制限区域内の警備は軍隊が担う

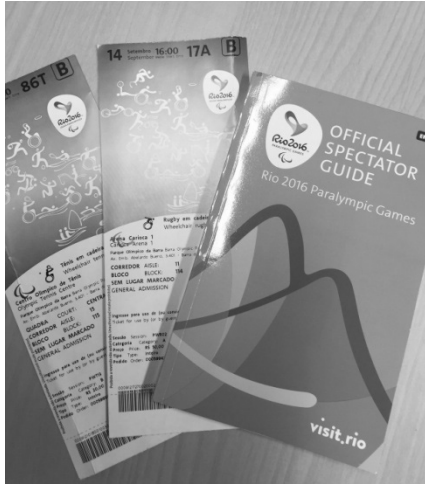


図7 外国人向けチケットと公式ガイドブック



図8 車いすテニス会場 日陰（左ルーフ下）に観客が集まる



図9 水泳会場 ブラジル選手の活躍もあり、決勝レースの指定席はほぼ満席

の水泳決勝、陸上競技、そしてサッカー（5人制：ブラインド、7人制：CP）については指定席もほぼ完売状態であり（図9）、会場内は至る所でカナリア色の背番号10を身にまとった観客に出会うことができた。観戦方法も、サッカーがベースとなっているようで、会場内でウエーブが起きる、鳴り物を使った応援が入る、立ち上がってサンバステップを踏む、応援歌の大合唱といった状態であった。しかしながら、視覚障害者の競技種目であるゴールボールなど、競技中は静寂を保たなければならない競技

であっても、観客の応援で競技が中断する場面も見受けられた。これは競技特性を知らないため、観戦方法がわからないことが背景にある。そこで、東京大会に向けては、競技を知ってもらうこと、そのうえで競技ならではの観戦方法を知り、楽しむことができるような情報提供や事前プログラムがあるとよい。

3. 東京2020への課題

東京はパラリンピックを2度開催する初めての都市となる。1964年は障害のある人がスポーツをすることを社会に認知してもらう、いわば「種まき」の大会であった。例えば、現在の全国障害者スポーツ大会の前身となる全国身体障害者スポーツ大会が開催されるようになったこと³⁾、また当時障害者スポーツの先進地域であった大分県では、大会期間中にあわせて別府義肢園で6日間の運動会が開催され、パラリンピックを契機とした障害者のスポーツ参加に貢献したことが報告されている⁴⁾。それから半世紀、パラリンピックはノーマライゼーションの実現、共生社会の実現にどのようなメッセージを発信することができるであろうか。

パラリンピックで行われる競技の特性は、障害のある人がスポーツをすることを前提に「できる」に着目した点にある。つまりアダプテッドの視点でルールや用具、技術などに工夫や変更がなされている。例えば、ボッチャという競技では、競技者のできる動きに合わせてさまざまな投球スタイルがある（図10）。また、ゴールボールでは、視覚に障害のある競技者が音でボールの位置を察知することから、競技中は審判の「Quiet Please!」のコール後は、ゲームが途切れるまで観客を含め競技場内の静寂を保つことが要求される（図11）。それらに気づき、理解することは、パラリンピック競技の見方を



図10 The Adapted Sports “ボッチャ” 多様な投球スタイル

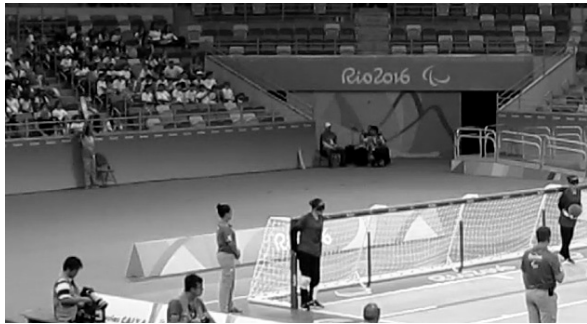


図 11 ゴールボール会場 Quiet Please! のボードを持つボランティアスタッフ

知ることと同時にそれらを取り巻く環境、人とのつながり、障害のある人への理解にもつながるであろう。競技特性を知った上で観戦することでパラリンピックならではの面白さ、多様な価値に気づいてもらいたい。そのためには、教育プログラムが重要な役割を果たすことは言うまでもない。2度目のパラリンピックを開催する東京から発信するパラリンピックムーブメントが大きく広がっていくことを期待している。

文 献

- 1) International Paralympic Committee (2013) : Accessibility Guide An Inclusive Approach to the Olympic & Paralympic Games.
- 2) 川内美彦, 前田有香 (2015) : 障害のある人にとっての競技場のアクセシビリティー 観客として, 競技者としてー, 日本財団パラリンピック研究会紀要第2号別冊. 5-6.
- 3) 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会 (2016) : 障がい者スポーツの歴史と現状
- 4) 大林太朗 (2015) : 2020年東京大会に向けた「オリンピック・パラリンピック教育」に関する一考察ー IPCの「パラリンピック教育」の定義と過去の事例分析からー, 日本財団パラリンピック研究会紀要第2号. 69-77.

謝 辞

写真を提供して下さった藤田紀昭（日本福祉大学）氏、難波真里（天理大学）氏にお礼申し上げます。